

幼児の自我の発達に関する行動評定

5, 6 歳児の実態

研究第5部 望月武子

I 目的

昨今の受験競争の激化は、偏差値重視の風潮を強め、塾を繁栄させ、学校教育を歪めている。子どもの発達のあらゆる時期で、それぞれの段階の生活や教育が常に次の時期のための準備という色彩を強めており、子どもを勉強に追いたて、あちこち塾通いすることが当然のように行われている。そして、この傾向は次第に低年齢化して幼児期の子どもの生活にまで及びつつある。このような場では、知的教育が偏重され、早く教育して、よくできること、早くできることを評価する傾向が強いうえに大人の用意したプログラムに合わせ、大人に動かされる教育が行われることが多い。このため、発達のために必要な経験や活動が軽視され阻害されることと相まって、その子らしい表現や自主性が損われ、人間としての発達に歪みを生じている面があることを見逃すことはできない。このような社会的風潮の中で、子どもの健全な発達のために真に重要なことを見極めて、それを実行していくことは容易ではなく、親自身も問題や不安を感じながらも風潮に流されてしまうのが現状である。

そこで、多少なりとも子どもの人格的発達に目を向け、子どもの心の内面の発達を考える助けになればと考え「幼児の自我の発達に関する行動評定」の作成を意図した。これは、外面からはとらえにくい自我の強さや発達程度を、子どもの行動を通してとらえることができないだろうかという試みである。

今年度は行動評定のための項目を選定し、これにより子どもの実態を把握するとともに、発達にかかわる要因を探ろうとした。(評定項目の選定は一部、前年度に教養相談室のメンバーと話し合いを進めていた)

II 方法

1. 評定項目の選定

自我の機能は、人間の意識や行動の全般にかかわる極めて多様で複雑な内容を包含するが、ここでは、自己実現と自己統制の側面からこれを考えようとした。

1) 自己実現(調査I)

意欲や創造性を含め、主体的活動により自己の可能性を実現させる傾向や力として考え、自己の認識、自由な自己活動や表現、自己主張、自己選択など、自立的行動やそれにより自己を実現するための意欲、自己実現するための他者とのかわり方などを内容として考えた。

2) 自己統制(調査II)

耐性、協調性、他者に対する配慮などを含めた適応能力や自己抑制力を考え、この中には他者の認識、自他を区別する力、欲求不満への耐性、人との協調性、責任感、ルールに従うなど、他を意識して適応するために自分の欲求をコントロールする力や他の立場にたって行動する傾向などを内容とした。

3) 生活習慣の自立(調査III)

生活習慣の自立は、自己概念や自己領域の拡大に大きくかわる行動であると考え、この領域もとりあげた。

以上のような考え方にそって、日常生活の中で比較的観察しやすい行動を選択し、各領域別に25項目ずつ用意した。内容は表1~3の通りである。

各項目について、子どもの状態と母親の意見とを4段階評定で回答を求めることにし、評定の基準は下記のようにした。

1) 子どもの状態

子どもが日常生活でどの程度まで実現し、到達しているかについて、

- 日常的によく見られ、よくできること、あるいは既に通りすぎたこと
- ときどき見られること、やらせればできること
- できないこと
- まだ経験したことがないこと

2) 母親の意見

- 子どもの年齢では当然できなくてはいけな

表1 自己表現

調 査 項 目 I	
1	賞められると得意になってやる
2	母から離れて友だち遊びを楽しむ
3	友だちに「……しよう」と誘いかけて遊ぶ
4	友だちに自分のやりたいことを主張してけんかになる
5	自分からやりたいことを見つけて良く遊ぶ
6	遊びはじめると夢中になって意欲的に遊ぶ
7	親の喜ぶことを自分からすすんでする
8	腹痛など自分で体の異常を訴える
9	友達を自分の家に誘って来る
10	ゲームやかけっこの時勝とうとしてがんばる
11	「こんなことできるか」と得意がったり自慢する
12	小さい怪我なら自分で薬をつける
13	納得できないと理屈をいって口答えする
14	いわれなくてもお客様に挨拶する
15	失敗してもめげずにがんばってまたやってみる
16	自分でやり始めたことや、決められたことを終りまでやりとげる
17	ひとりで近所の店にお使いに行く
18	順番がくれば人の前で話したり歌ったりする
19	他の子が困っているとすすんで手助けをする
20	ひとりで友達の家遊びに行く
21	遊びやグループ活動の中で自分の意見をいう
22	遊びのルールなどを友達に教える
23	遊びを工夫したり新しい遊びを考え出す
24	玩具やお菓子など自分の欲しいものを選ぶのにあまり迷わない
25	自信をもって積極的に行動することが多い

表2 自己統制

調 査 項 目 II	
1	頭を洗ってもいやがったり泣いたりしない
2	欲しい物があってもわけを言いかければききわける
3	自分の物と人の物を区別して扱う
4	友だちに自分の物を貸して遊ぶ
5	予防注射のとき泣いたり、嫌がったりしない
6	乗物の中で騒いだり、動きまわって人に迷惑をかけない
7	転んでも小さい怪我なら泣かない
8	お客様に出した菓子をほしがらない
9	お客にいったらしばらく行儀よくしている
10	友だちと順番に玩具や遊具を使って遊ぶ
11	ごっこ遊びでそれぞれの役割をとって遊ぶ
12	友達と互に主張したり妥協したりして遊ぶ
13	かわいそうな話を聞くと同情したり涙ぐむ
14	人前で泣くことをこらえる
15	約束をすると守ろうとする
16	人が話をしている時はよくきいている
17	おやつ・就寝など決められた時間は大体守る
18	登園の時間には遅れないよう自分で注意している
19	危険な遊びなど禁止されていることはしない
20	ゲームに負けても怒ったり騒いだりしない
21	自分より小さい子のわがままを許す
22	他の子に迷惑をかけたらあやまる
23	車の通る道をひとりで歩かせても心配ない
24	ひとりで1時間ぐらい留守番をする
25	自分のあやまちをごまかさないで認める

表3 生活習慣

調 査 項 目 Ⅲ	
1	ほとんど大人の世話にならないで食事をする
2	食事中席を立ったり遊んだりしないで食べる
3	食事の用意や食後の食器を運ぶのを手伝う
4	ひとりでおしっこにいき、大人の手がかからない
5	遊びに夢中になってもおもらしをしない
6	大便のあときちんと拭く(大人の手がかからない)
7	靴を左右まちがわずにはく
8	ひとりで傘をさしたり、つぼめたりする
9	セーター、Tシャツをひとりで着る
10	前のボタンをはめたり、はずしたりする
11	ひとりで顔を洗ってふく
12	鼻をじょうずにかむ
13	歯ブラシを使って歯をみがく
14	入浴の時、ある程度自分で体を洗う
15	遊んだあと玩具をかたずける
16	ひとりで寝にいく
17	自分の使ったものを使いっぱなしにしない
18	ハンカチで弁当を包む(かた結び)
19	ひとりで大体衣服を着脱する
20	箸で豆など小さいものをはさんで食べる
21	着かえ、洗面、持物の始末など子どもにまかせられる
22	ねる前に自分からトイレにいき、歯みがきする
23	袖口のボタンをとめる
24	タオルをしっかり絞る
25	ひとりで魚の骨などよりわけて食べる

える

B. 今がこのことを身につける最良の時期と考える

C. まだ要求するのは早すぎると考える

D. 将来的にも子どもに必要なと考え

2. 調査方法

3歳から6歳の幼児を対象に、都内4か所の幼稚園を通して調査票を配布し、母親に記入を依頼した。

また、選択した項目で自我の発達を把握することができるとかを吟味するために、さらに、母親の回答の有効性をみるために、幼稚園の担任教諭には自己実現、自己統制の両面から子どもの行動をみた時、クラス内でその発達が上位にあると思われるもの、下位にあると思われるもの各5名をあげてもらった。

調査時期は61年2月であり、4歳から6歳まで400名の資料を得た。ここでは5歳児153名、6歳児150名についての分析結果を中間報告する。

Ⅲ 結 果

1. 各項目の出現率

各項目について、子どもがどの程度実現し、到達しているか、また、それらの行動の実現に対し親がどのような意見をもっているかを知るため、年齢別にその出現率を求めた。

1) 自己実現

① 子どもの状態

既に70%前後のものがa段階に達しているのは、5歳児では項目番号1, 2, 5, 6, 8であり、6歳児ではこの他に3, 9, 10, 20が加わっていた。項目4以外は5歳児に比べ6歳児の方が出現率が高く、この時期に発達変化が目だったものは3, 9, 17, 18, 19, 20であった。

発達には項目により性差が認められた。a段階への到達率に性差がみられたものは表4の通りで、6歳児の項目11を除いて、いずれも女児の発達が優位である傾向が認められた。

② 母の意見

この領域の行動に対する母の意見を、子どもの状態a段階と母の意見Aを対応させて比較してみると、5, 6歳児とも項目4, 14を除き、いずれの項目も子どもの発達が先行し、母の意見はそれに追従している状態であった。この両者の出現率に差のあるものを表5に示した。4(友だちの中で自分を主張できること)、14(自発的に挨拶すること)に対しては子どもの状態に比し母の要求が高く、他は子どもの状態に比べ母の意見は消極的であるといえる。また、母の意見は子どもの性により差がみ

られたものがあり、表6に示したように、この領域では男児に対して高い要求をもつものが多かった。

2) 自己統制

① 子どもの状態

5歳児で70%前後がa段階に到達している項目は、1, 3, 4, 7, 11であり、6歳児では、2, 5, 10, 12, 19がこれに加わっていた。この時期に発達変化の大きいものは6, 10, 19, 22, 23, 24である。

この領域の行動で、a段階への到達率に性差がみられたものは表7の通りであり、いずれも女児の発達が早くなっていた。

② 母の意見

この領域の行動を、子どもの状態aと母の意見Aを対応させて比較してみると、子どもの状態よりも母の要求が上まわっている項目が自己実現の領域に比べやや多くなっていた。5歳児では6, 7, 8, 10, 17, 22, 25が、6歳児では1, 2, 5, 6, 7, 8, 16, 17, 18, 22, 25がそれである。

子どもの状態と母の意見に差が目立ったものは表8の通りである。6(乗物の中で人に迷惑をかけない), 8(客に出した菓子を欲しがらない)は子どもの状態に比し、

母の要求が高くなっているが、女児では両者間の差はなく、男児のみにみられた差である。

この領域で母の意見に性差が見られたものは表9に示した3項目であり、女児に対してはより高い要求が示されている。

3) 生活習慣

① 子どもの状態

5歳児でa段階への到達率が70%に達しているものは項目1, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 13, 19であり、6歳児ではこの他12, 14, 20が加わっていた。この時期に発達変化が目立った項目は、6, 12, 14, 15, 16, 18, 21である。

a段階への到達率に性差がみられたものは表10の通りであり、いずれも女児の発達が優位であった。

② 母の意見

この領域の行動について、子どもの状態aと母の意見Aを対応させて比較した時、両者間に差があるものを表11に示した。この領域では母の要求が子どもの状態に先行しているものが多く、生活習慣の自立については子どもに対し強いかわりをもっていることが推測できる。

母の意見に性差がみられたものは表12の通りであり、

表4 a段階到達率に性差があるもの(自己実現)

年齢	項 目	男	女
5 歳	5. 自分からやりたいことをみつけて良く遊ぶ	73.7 %	87.0* %
	12. 小さい怪我なら自分で薬をつける	23.7	40.8*
	15. 失敗してもめげずにがんばってやる	18.4	47.4*
	19. 困っている子をすすんで手助けする	21.1	37.7*
6 歳	11. こんなことできるかと得意がったり自慢する	56.3*	41.3
	12. 小さい怪我なら自分で薬をつける	23.3	44.7*
	14. いわれなくても客に挨拶する	28.4	43.4*

表5 子どもの状態と母の意見に差があるもの(自己実現)

年齢	項 目	子どもの状態	母 の 意 見
5 歳	10. ゲームやかけっこの時勝とうとしてがんばる	64.5* %	39.1 %
	17. ひとりで近所の店に使いに行く	33.3*	17.1
	20. ひとりで友だちの家へ遊びに行く	52.9*	35.3
	21. 遊びやグループの中で意見をいう	44.1*	28.1
	22. 遊びのルールなどを友だちに教える	44.4*	26.8
6 歳	4. やりたいことを主張してけんかになる	23.8	46.0*
	10. ゲームやかけっこの時勝とうとしてがんばる	70.0*	51.4
	14. いわれなくても客に挨拶する	36.0	54.4*
	20. ひとりで友だちの家に遊びに行く	66.7*	50.7
	22. 遊びのルールなど友だちに教える	50.0*	34.7

望月： 幼児の自我の発達に関する行動評定

表6 母の意見に性差のあるもの（自己実現）

年齢	項 目	男	女
5 歳	2. 母から離れて友だち遊びを楽しむ	77.6* %	62.3 %
	4. 自分のやりたいことを主張してけんかになる	49.3*	35.1
	11. こんなことできるかと得意がったり自慢する	41.3*	26.0
	25. 自信をもって積極的に行動する	14.5	28.9*
6 歳	4. 自分のやりたいことを主張してけんかになる	54.4*	38.0
	13. 納得できないと理屈をいって口答える	52.2*	37.7
	23. 遊びを工夫したり新しい遊びを考え出す	42.5*	29.2

表7 a段階到達率に性差があるもの（自己統制）

年齢	項 目	男	女
5 歳	6. 乗物の中で騒いだり動きまわって人に迷惑を……	34.2 %	60.5* %
	11. ごっこ遊びでそれぞれの役割をとる	65.8	82.9*
	19. 危険な遊びや禁止されていることはしない	42.1	68.4*
6 歳	2. 欲しいものがあっても云いきかせればききかける	55.4	80.3*
	6. 乗物の中で騒いだり動きまわって人に迷惑を……	54.2	72.4*
	13. かわいそうな話を聞くと同情したり涙ぐむ	46.6	65.3*
	16. 人が話をしている時よくきいている	33.8	50.0*
	19. 危険な遊びや禁止されていることはしない	60.8	77.6*
	21. 自分より小さい子のわがママを許す	37.0	52.6*

表8 子どもの状態と母の意見に差があるもの（自己統制）

年齢	項 目	子どもの状態	母 の 意 見
5 歳	6. 乗物の中で騒いだり動きまわって人に迷惑を……	47.4 %	64.2* %
	11. ごっこ遊びで役割をとって遊ぶ	74.3*	56.7
	12. 友だちと互に主張したり妥協したりして遊ぶ	63.1*	43.0
	15. 約束を守ろうとする	54.6*	37.5
6 歳	8. 客に出した菓子をほしがらない	46.7	59.1*
	24. ひとりで1時間ぐらい留守番をする	51.0*	38.8
	25. 自分のあやまちをごまかさずに認める	30.9	45.9*

表9 母の意見に性差のあるもの（自己統制）

年齢	項 目	男	女
6 歳	8. 客に出した菓子を欲しがらない	67.6* %	50.7 %
	19. 危険な遊びや禁止されていることはしない	59.5	74.7*
	21. 自分より小さい子のわがママを許す	28.8	46.7*

表10 a段階到達率に性差があるもの（生活習慣）

年齢	項 目	男	女
5 歳	11. ひとりで顔を洗って拭く	71.0 %	88.3* %
	12. 鼻をじょうずにかむ	38.2	59.7*
	14. 入浴時にある程度体を洗う	53.9	74.0*
	18. ハンカチで弁当を包む（かた結び）	14.7	38.2*
	20. 箸で豆などはさんで食べる	51.3	76.6*
	23. 袖口のボタンをとめる	13.2	33.8*
6 歳	3. 食事の用意や食器運びを手伝う	37.8	56.6*
	18. ハンカチで弁当を包む（かた結び）	39.7	68.4*
	23. 袖口のボタンをとめる	27.4	47.4*

表11 子どもの状態と母の意見に差があるもの（生活習慣）

年齢	項 目	子どもの状態	母 の 意 見
5 歳	2. 食事中席をたったり遊んだりしないで食事をする	40.1 %	65.8* %
	15. 遊んだあと玩具を片づける	30.7	55.2*
	17. 自分の使ったものを使いっぱなしにしない	16.4	40.1*
6 歳	2. 食事中席をたったり遊んだりしないで食事をする	51.3	76.0*
	15. 遊んだあと玩具を片づける	50.0	77.3*
	17. 自分の使ったものを使いっぱなしにしない	23.3	52.7*
	22. 寝る前に自分からトイレにいき、歯みがきする	55.0	73.2*

表12 母の意見に性差のあるもの（生活習慣）

年齢	項 目	男	女
5 歳	20. 箸で豆などはさんで食べる	39.5 %	63.6* %
6 歳	14. 入浴時に自分で体を洗う	73.0	86.7*
	18. ハンカチで弁当を包む（かた結び）	47.3	67.6*
	23. 袖口のボタンをとめる	37.0	57.9*

女兒に高い要求が示されているが、いずれも子どもの発達状態と関連したものである。

2. 領域別得点

1) 性別による比較

各領域の発達を総体的にみるためにa段階に2点、b段階に1点を与え、領域別の得点を算出した。

5歳児、6歳児の得点とその変化を母の意見と対応させて性別に示したものが図1である。子どもの行動はどの領域も女兒の方の得点が高くなっており、自己実現の領域ではその差は少ないが生活習慣の領域では顕著な差がみられた。

各領域に対する母の意見には興味深い傾向がみられた。即ち、子どもの行動との関連でみると自己実現の領域で

は子どもの発達に比し母の要求は低く、自己統制の領域では両者がほぼ適合しているが、生活習慣の領域では子どもの状態を上まわる高い要求を示していた。また、性別にみると、自己実現では女兒に比べ男児への要求が高く、自己統制では性による差はなくほとんど一致しており、生活習慣では男児に比し女兒への要求が高くなっていった。

2) 出生順位による比較

各領域の得点を子どもの出生順位別にみたものが図2である。5歳児では各領域とも一人子の得点が高く、第一子が最も低くなっていた。これに対し母の意見は一人子に最も要求が高く、第一子、末子の順になっていた。6歳児では、一人子の得点が高い傾向はみられるが、第

望月： 幼児の自我の発達に関する行動評定

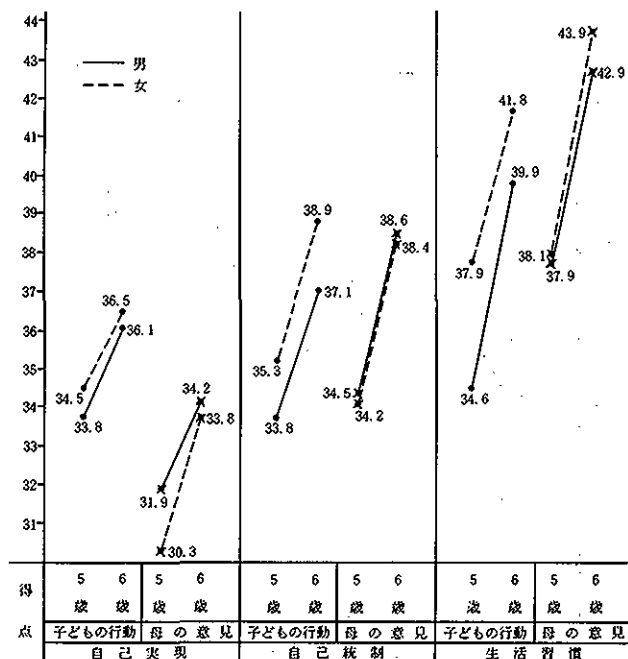


図1 性別にみた5歳～6歳の得点の変化

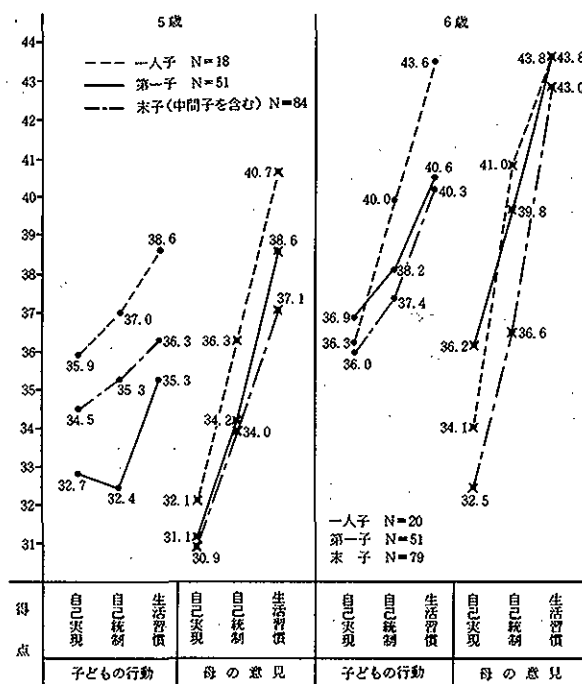


図2 出生順位による各領域の得点の比較

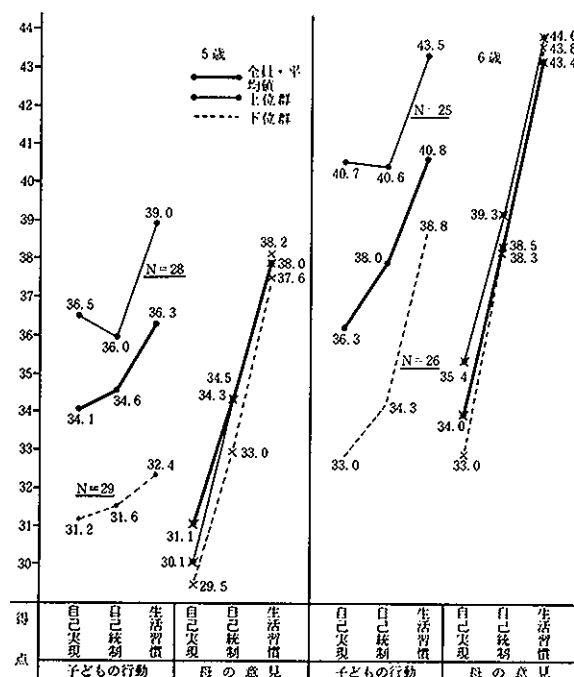


図3 担任の評価による発達上位群と下位群の得点の比較

一子が末子の発達を凌いでおり、末子は各領域とも得点が最も低くなっていた。

これに対する母の意見は、末子が各領域とも得点が低く、自己実現、自己統制では他のグループに比しその差が大きい。子どもの行動は成長に伴い出生順位による差が少なくなり接近しているのに、母の意見は出生順による差が大きくなっていた。

3) 担任の評価と得点の比較

クラス内の子どもの行動から相対的にみて発達の上位にあるもの、下位にあるものを各5名ずつ担任にあげてもらったが、それぞれの群の得点を各年齢の平均値と比較したものが図3である。5歳児、6歳児とも子どもの行動には上位群と下位群の間に明らかな差があり、この調査で子どもの発達を把握することの可能性が確かめられた。なお、母の意見には上位群と下位群の間に顕著な差はみられなかった。

以上から、われわれが自我の発達として考えた自己実現、自己統制、生活習慣の各領域の発達は、子どもの性別、出生順位によりかなり差がみられることが明らかになった。そして、この発達の差は文化、社会的要因を

背景にした母自身の子どもの行動に対する要求や期待と関連をもつものであると推測される。

IV 要約

子どもの心の内面的な発達に目を向けるため、自我の発達を日常的な行動を通して把握することが出来ないかという試みとして、行動評定の作成を意図した。

今年度は、評定項目を選定し、それにより子どもの行動と母の意見の実態を把握するため、都内4か所の幼稚園を通して資料を集めた。

5歳児、6歳児の資料を分析した結果は、1)各領域とも女児の発達が優位であり、自己統制、生活習慣の領域ではその差が大きかった。2)母の意見は自己実現では男児への要求が高く、生活習慣については女児への要求が高くなっており、自己統制については性による差はなかった。3)担任がクラス内で相対的に評価した発達の上位群と下位群は本調査の評定得点と適合していた。

なお、本研究は立正大学短期大学部野田幸江と共同で行ったものである。

Abstract

Behavior Evaluation in Reference to the
Ego Development of Preschool Children

Takeko MOCHIZUKI

For the purpose of giving mothers who have infants the great attention to the inner part of mental development, it was intended to develop the behavior evaluation method by which we'll be able to understand the ego development of each child through the outer daily life behavior.

Items for evaluation being selected, many data on children's daily life behavior and mothers' opinions were collected through 4 kindergartens in Tokyo.

The results were:

1. On children's daily life behavior, girls developed more than boys in every category particularly in self control.
2. On mothers' opinions, they asked for the self assertion toward boys more than girls.
3. The grade of childrens' development which teachers of their kindergartens evaluated matched for them which we evaluated.